

大塩平八郎の乱



* 毛利家文庫 75維新記事雑録314「阪賊移檄」

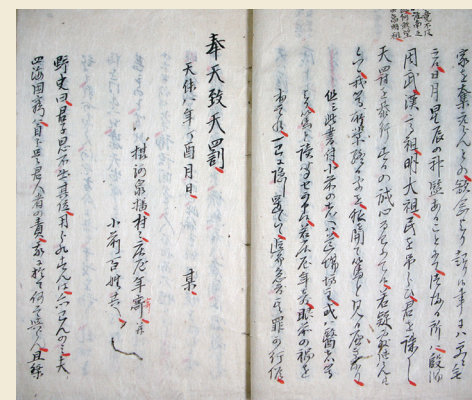
解説

大塩平八郎は江戸時代後期の大阪町奉行所の与力であり、陽明学者です。しばしば難事件を処理し名与力と称され、学者としても自邸に洗心洞と名づける学塾を開くなど、広く知られていました。

しかし退職後、天保の大飢饉で餓死者が続出する惨状に直面し、奉行所に対して民衆の救援を提言しましたが拒否され、仕方なく自らの蔵書数万冊を全て売却し、得た資金をもって救済に当てました。

このような情勢の下、利を求めて米の買い占めを図っていた豪商たちに対して平八郎らの怒りも募り、1837（天保8）年2月に「救民」をかかげて決起しました。

乱は半日で鎮圧されましたが、幕府の直轄領大阪で、幕府の元役人が乱を起こしたこと、また著名な学者だったことなどは当時の社会に大きな衝撃を与えました。



- *（同資料）大塩平八郎が決起の前に近在の農村に蜂起を呼びかけた檄文（げきぶん）の写しの最後の部分。日付の前に、大きく「奉天致天罰」とあります。
- * この檄文は幕府の取締りをかいくぐって筆写により全国に伝えられ、越後では影響を受けた国学者の生田万が代官所を襲撃するなど、その影響はすこぶる大でした。